加島雅之先生の方剤解説 シリーズ 3

知っておきたい 補中益気湯の基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生　熊本赤十字病院 総合内科 部長

出典　内外傷弁惑論

補中益気湯の出典は、『内外傷弁惑論』(李東垣・1247年)である。

効能・効果

元気がなく胃腸のはたらきが衰えて疲れやすいものの次の諸症：虚弱体質、疲労倦怠、病後の衰弱、食欲不振、ねあせ

補中益気湯創方の背景

補中益気湯創方の背景が『内外傷弁惑論』に記されている。1232年、当時、李東垣が滞在していた金の首都である開封が蒙古軍に数ヵ月間包囲され、100万人もが熱病を発症し、多くの人命が失われた。李東垣は、通常の外感病の治療は無効であったことから、病態の本態は内傷であると考えた。

そして、李東垣の代表的な著作である『脾胃論』で、なぜ外感以外の機序で発熱をするかということについて述べている(飲食が不節制、寒温が不適切のために脾胃が障害される。喜怒憂恐が元気を損耗する。脾胃の気が衰え、元気が不足すると、心火が独り盛んとなる。心火は陰火である。下焦より起こり、その系は心に繋がる。心が主令しないと相火がこれに代わる。相火は下焦の包絡の火である。元気の賊である。火と元気は両立できない、一方が勝れば一方は負ける。脾胃気虚すれば、腎に下流し陰火はその土位に乗ずることが出来る)。

相火論

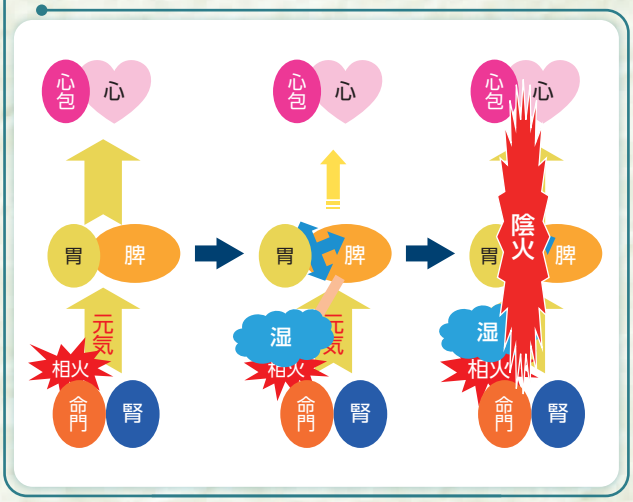
漢方において、体の熱の源は心に宿り主に意識の清明さなどにかかわり全身を統括する「君火」と、腎・命門に宿り君火の命令下に身体活動を支える「相火」の二つが想定されていた。そして、相火は時に勝手に暴走し、邪的な性質を帯びることもあると考えられていた。

また、「陰火」については当時の一般語として、地熱・水中発光を意味し、相火が体の奥で燃え盛る姿を示す用語として用いられたことが指摘されている[1)]。

李東垣の陰火説(図1)

腎から上昇する元気が脾胃で食物の気と合わさり、本来ならば心に上昇して「君火」となるが、飲食・寒温の不摂生が生じると脾胃の気が消耗して元気が上昇しなくなり、たまった湿が腎に下流して「相火」に覆い被さるような状況になる。そのため「陰火」が上昇し、全身に激しい熱を生じる、と述べられている。

図1　李東垣の陰火説



甘温除大熱法

これらの説から、内外傷弁惑論や脾胃論の中で補中益気湯をどのような理由で作ったのかを述べた「立方本旨」の内容を読み解くことができる(参考 図5：33頁参照)。

補中益気湯と類縁処方との関係
ー『益気健脾』の方剤の組み立て

益気健脾の基本骨格である【白朮＋茯苓】に、脾胃を守る大棗＋生姜、甘草と、人参を加えると四君子湯となり、さらに和胃化痰の陳皮・半夏を加えると六君子湯となる。四君子湯に黄耆、柴胡・升麻、陳皮、当帰を加え、気を下げる働きを持つと考えられる茯苓を除くことで、強力に補気しつつ上向きのベクトルを強めた組成が補中益気湯である(図2)。

● 六君子湯(図3)

脾気虚を背景に痰湿や胃気滞が合併している病態に用いる処方である。消耗に伴う食欲不振、消化吸収能力の低下、上腹部不快感や嘔気が生じる場合に用いる。

● 加味帰脾湯(図3)

心血虚、脾気虚があるところに肝の気滞や熱が合併した病態に対し、心血と脾気を補い、熱を発散させる処方である。消耗に伴いエネルギー不足と病的不安感、焦燥感、熟眠障害、胸や顔のほてりなどの症状があるときに用いる。

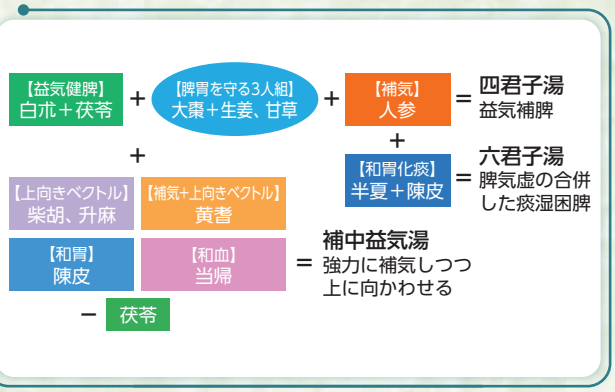
● 十全大補湯(図3)

気血両虚と腎虚、冷えが合併している病態に用いる処方である。消耗や老化による栄養状態の悪化、倦怠感、組織の活力の低下、消化吸収機能の低下を温めながら気・血を供給・分配する。

● 人参養栄湯(図3)

十全大補湯に近い処方だが、特定の臓腑(脾・肺・心)に指向性の高い処方であり、慢性の息切れ、体重減少、フレイル・サルコペニアに加えて不眠、病的不安感、身体表現性障害などの症状に用いる。

図2　『益気健脾』の方剤の組み立て



古典に見る補中益気湯の臨床応用

『万病回春』補益門

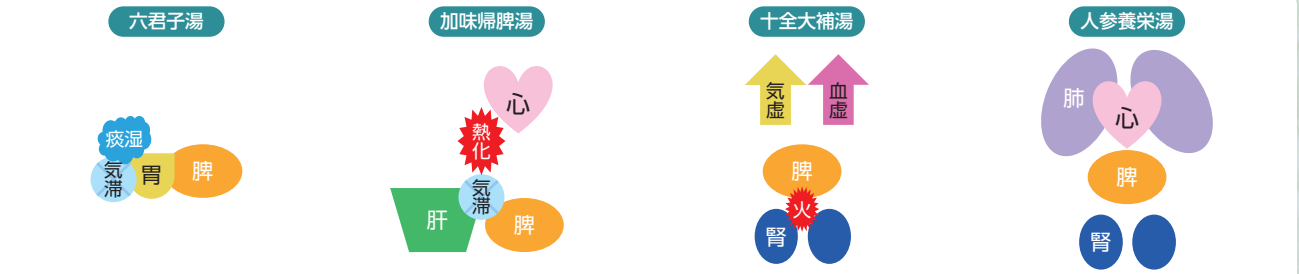
『万病回春』補益門では、「消耗・倦怠感が生じているときに、何らかの熱性症状が生じている、もしくは何らかの感染症に罹患していても通常の瀉法では治療が難しい場合に用いる」ことが記されている。

『医方口訣集』(江戸：長沢道寿)

長沢道寿は『医方口訣集』で補中益気湯の使用方法を提案している。

- 内傷病で頭痛、悪寒発熱、往来寒熱、体が痛く、口が

図3　補中益気湯の類縁処方



脾気虚：消耗に伴う、消化吸収力低下、食欲低下
胃気滞：胃もたれ、上腹部膨満感、嘔気
痰湿：湿度の上昇、油もの、水分摂取、飲酒で増悪する、上腹部不快感

心血虚：病的不安(予期不安)、熟眠障害
気虚：疲れ、消耗、エネルギー不足
肝の気滞：イライラ、抑うつ
気の熱化：易怒、興奮などの陽性症状

気虚：疲れやすい、組織の活力低下
血虚：栄養不足、皮膚・髪が乾燥・脆い
腎虚：消耗・老化

脾気虚：考えがまとまらない、疲れやすい
肺気虚：息切れ、慢性咳嗽、身体表現性障害
心血虚：病的不安(予期不安)、熟眠障害

乾き、外感病のようだが内傷不足の兆候があれば使用する。

- 虚弱な人が内傷に合併して外傷を発症した場合に内傷が重い者ではこの方剤を主にして六経弁証に従って随証加減して使用する。また、外感が重い者ではまず外感の処方を使用し、その後に本処方を使用する。
- 壮健な人でも発汗・吐下の治療をしてもまだ治らない者に使用する。
- 慢性化したマラリア、下痢・咳嗽など陽気が下陥した者に使用する。
- 手足などが萎縮し痛み、半身不随、体に虫が這うような不随運動などは脾胃虚であり、一般には中風として治療するときも脈をみて使用する。
- 夕方から発熱、尿が出し渋る、大便が乾燥し便秘、舌に裂紋が走り口が乾き、自汗・寝汗が出るのは陰血の不足で、この処方に八味丸や地黄丸料(六味地黄丸料)を併用する。

『百方口訣集』(江戸：津田玄仙)

津田玄仙は補中益気湯の使用の指標になる8つの症状(言語軽微、眼精無力、脈散・大・無力、手足倦怠、食に滋味を失す、口に熱湯を好む、口中に白沫、臍に動悸)を提案している。しかも、8項目中の2～3項目があれば補中益気湯を用いて構わないとも述べている。

補中益気湯の応用範囲

補中益気湯の応用範囲は広く、現代中国では胃下垂・子宮下垂・重症筋無力症・糖尿病・メニエール病・内痔核・不眠・低血圧・習慣性流産・慢性肝炎・慢性腎炎・癌・敗血症など様々な病態に用いることが報告されている。

本邦でも『古今方彙』(江戸：甲賀通元)において、収載された全280病門(1,894方剤)の中で補中益気湯は最多の72病門(89回)に使用されており、わが国では“医王湯”とも称されている。

補中益気湯の効能と臨床応用

補気昇陽(図4)

● 症例1　75歳 男性。主訴：倦怠感、食欲不振。

COPDで在宅酸素療法中であり、肺炎に罹患して入院した。抗菌薬による加療で肺炎は治癒したが、倦怠感、息切れ、食欲不振が持続し、退院2週間後も食欲は1/5程度が持続していた。脾肺不足と弁証し補中益気湯を処方したところ、約1週間の経過で食思が改善した。

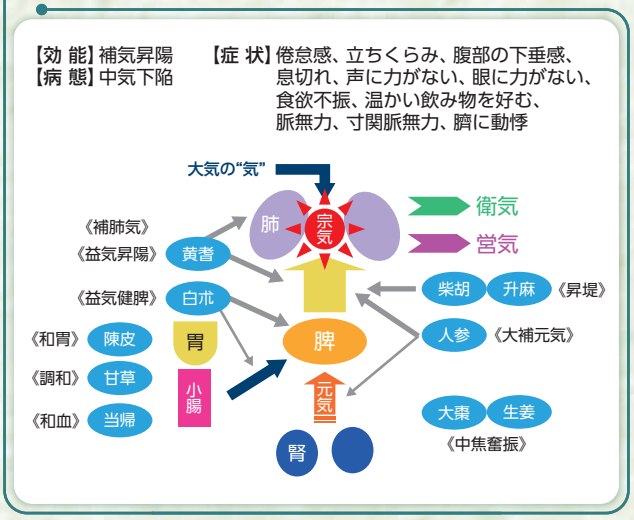
● 症例2　77歳 女性。主訴：頻回の転倒、下痢。4年前からパーキンソン病で加療中。

頻回の転倒(この1年は3回/日)と、3ヵ月前から下痢がほぼ毎日続いていた。倦怠感があり力が入りにくい、食欲もあまりわかない、息切れ、体は冷える、脈は両側虚、舌はやや淡・苔薄白である。中気下陥と弁証した。補中益気湯の服用開始約2週間で下痢は1行/3日程度に減少した。転倒の頻度も減少し、約4週間の服用で1回/2～3週間にまで改善した。

● 症例3　64歳 男性。主訴：水様下痢。クローン病で腸管切除され短腸症候群。

尿管結石に伴う腎後性腎不全で入院し、尿管ステント留置で腎不全は改善した。5～6行/日程度だった水様下痢が入院後から10回/日程度に増悪し、水様下痢でふらつきがある。脾気虚で気が上昇できない中気下陥の病態に補中益気湯を、さらに水様下痢で手足も冷たく尿量低下の循環障害を伴う状況で脾と腎の陽気の不足に真武湯を用いた。補中益気湯の服用によって水様下痢が著明に減少し、さらに真武湯の併用で便は普通便に近くなった。

図4　補中益気湯の効能と臨床応用①



甘温除熱・補気昇陽（図5）

● **症例4　28歳 女性、主訴：発熱、倦怠感、寝汗。SLE疑いで経過観察中。**

仕事で無理をして2日間の徹夜後から微熱（37℃台前半）と倦怠感、寝汗が出現し、2週間経過後も改善しなかった。症状は、口渇感、食欲不振があり、脈散大、按じて無力、目に力がない。気虚発熱と弁証し、補中益気湯を処方したところ、約3日で解熱し、寝汗が出なくなった。その後、食欲不振、倦怠感も改善した。

補気内托（図6）

補中益気湯には体表面、もしくは肺における気の不足のために、体表面の外邪を取り除くことができない、もしくは皮膚で肉芽が上がらないものに対する作用を期待した用い方もある。

現代医学においても、慢性創傷患者の治癒機転の改善効果、肺MAC症患者に対する改善効果が報告されている[2, 3]。

循環に対する補中益気湯の効果

補中益気湯を用いる際に腎の働きも助けるような方剤を用いると、難治性の病態に対して有利に働くことがある。

● **症例5　89歳 女性。主訴：下肢のむくみ、呼吸苦。**

重症動脈弁狭窄症があり、頻回の失神発作と心不全が出現していた。SBP≧140mmHgで心不全となり、<100mmHgで失神する。補中益気湯と降圧利尿薬などを内服中だが、2週間前より下肢の浮腫が増悪し、元気がなくなり、徐々に食事量低下、食事後や入眠中に呼吸苦を訴えるようになった。呼吸終末の喘鳴、脛骨前面浮腫、四肢の冷感があった。より循環を改善する目的で真武湯と附子末を追加投与したところ、翌日から尿量が増加し、3日後より食思が回復し、喘鳴、下肢の浮腫も改善した。

補中益気湯の位置づけ

補中益気湯の位置づけは以下のとおりである。

①気を補い、上昇・体表に送る

②肺・脾の気を補う時に使用する

③気虚発熱のファーストチョイス

図5　補中益気湯の効能と臨床応用②

【効 能】甘温除熱、補気昇陽
【病 態】気虚発熱、陰火
【症 状】発熱、倦怠感、口渇、温かい飲み物を好む、脈散、無力

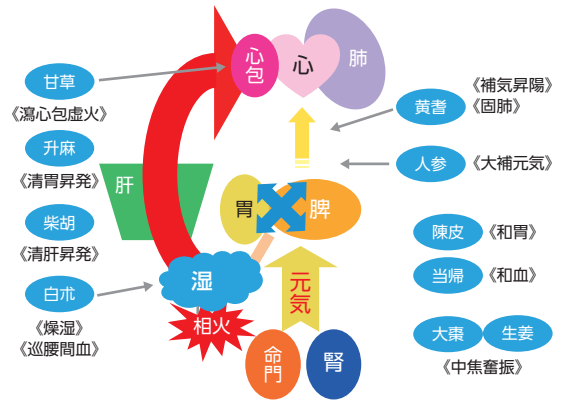
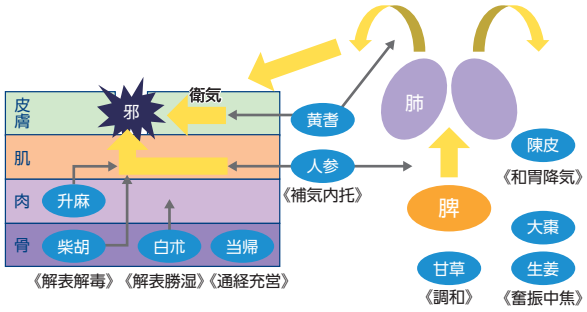


図6　補中益気湯の効能と臨床応用③

【効 能】補気内托
【病 態】気虚易感、気虚留邪
【症 状】発熱、悪寒、咳嗽、下痢、肉芽が上がらない、脈無力、散大、寸脈無力



参考文献

1）篠原明徳: 中医臨床 26: 59-63, 2005
2）Akita S, et al.: Wound Repair Regen 27: 672-679, 2019
3）Enomoto Y, et al.: PLoS One 9: e104411, 2014